

本日お読み頂いた聖書の箇所は、コリントの信徒への第一の手紙3章であります。コリントという町は、ギリシャの南端に突き出た半島であるペロポネソス半島とギリシャ半島とを結びつける陸の道の終着点に位置する港町でした。東のエーゲ海と西のイオニア海とをつなぐ交通の要衝として栄え、パウロの時代にはギリシャで最大の人口をもつ大きな都市でありました。そこに立てられた教会がコリント教会で、この教会は使徒パウロが開拓した教会の中で、もっとも規模が大きい教会であったと見られます。

パウロは、この町でプリスキラとアキラというユダヤ人の夫婦の家に住み込み、天幕づくりの仕事をしながらか自給伝道を行いました。パウロがコリントに滞在した期間は、およそ1年と6か月であったと、使徒言行録は記しています。ひとつの教会を1年半で立て上げるとは、驚きです。ちなみに、私たちの大泉教会は今年の3月で創立58周年をむかえました。今年度は、創立の年から数えて、59年目の歩みに入っているわけです。ところが、コリントの町ではわずか1年と半年で教会ができていたのです。それは、本当に驚くべきことです。そのような短い期間で教会の基礎固めをしたあと、パウロは次の開拓伝道地であるエフェソに向かいました。プリスキラとアキラ夫妻も、その船旅に同行したと聖書には記されます。パウロは、エフェソを訪問した後、エルサレムを訪問し、エルサレム訪問の目的を果たすと、今度は陸路でエフェソにはいりました。プリスキラとアキラは、パウロが不在の間エフェソに留まり、パウロの帰りを待っていたと思われる。伝道者を支えるこのような信徒である夫婦の存在が、どれほどパウロを力づけたことか。この箇所をよむたびに、わたしは胸が熱くなるのであります。

ところが、その一方で、残されたコリントの教会は、初代牧師であるパウロがいなくなったことで大きな問題が生じていました。パウロの後を継いで2代目の牧師となったアポロが着任すると、教会のなかで、指導者をめぐって争いが起き、分裂・分派の問題が起きたのです。本日の4節を見てみましょう。「ある人が、『わたしはパウロにつく』と言い、他の人が『わたしはアポロに』などと言っているとすれば、あなたがたはただの人にすぎないではありませんか」「ただの人」と訳されていますが、「ただの」という言葉は原文にはありません。直訳すれば「人間として歩んでいる」となります。生れつきの人間のまま生きている、ということです。イエス・キリストを信じる者、すなわち、キリストと結ばれる洗バプテスマ礼を受けた者は、もはや生まれつきの人間のままではないはずだ。神からの霊を受けて、霊の人となっているはずだ。それなのにあなたがたはいつまでもたっても肉の人、乳飲み子のままではないか、パウロはそう言って、コリント教会の信徒をたしなめているのです。

なぜ、コリント教会では指導者をめぐる分争が起きたのでしょうか。詳しい事情は書かれていません。ただ、これは私の推測なのですが、もしかしたら説教をめぐる問題がコリント教会のなかで起きていたのではないかと思うのです。アポロという伝道者は、アレキサンドリア生まれで、雄弁なユダヤ人だったとあります。アレキサンドリアは、エジプト北岸にある港町で、当時の地中海世界でディアスポラのユダヤ人が最も多く住んでいた町でした。ちなみに、旧約聖書のギリシャ語訳である「70人訳聖書」は、このアレキサンドリアで作られています。そのような文化的な町で生まれたアポロは、教育熱心なユダヤ人の家庭で育ち、とても雄弁だったため、聖書の説き明かし、つまり説教がパウロよりも上手だったのではないか。話が分かりやすかったのではないか。他方、パウロはアポロほど雄弁ではなかったことが知られています(第2コリント10章10節)。しかし、アポロには、ひとつ欠けていたものがありました。それは、使徒言行録18章にあります。彼がヨハネのバプテスマしか知らなかったということです。ペンテコステの日にイエスの弟子たちが経験したあの聖霊のバプテスマをアポロは知らなかった。それは、彼が福音を霊的に理解して語ることに不十分であった可能性を示唆します。他方、パウロは自身が復活のイエスと出会い、聖霊によるバプテスマの体験をしています。パウロがいなくなった後、コリント教会は礼拝の説教内容の点で、つまり福音の説き明かしをめぐる問題が起きていたのではないのでしょうか。だから、ある人は「わたしはパウロ先生の説教のほうがよかった」といい、ほかの人は「いや、わたしは今のアポロ先生の方がいい」というような恰好で、争いが起きたのではないか。しかし、わたしたちは注意せねばなりません。このような争いの本当の原因は、決して神学的な問題、福音的な問題であるとは思えません。もっと肉的な問題に根差して

いる。つまり、自分のプライドや相手へのねたみ、好き・嫌いという、およそ誰もが生まれながら持っている感情のゆえに、分派活動を行い、グループを作っていたと思われるのです。めったにないことですが、教会が二つに割れるような大きな問題に直面した教会の話を知ると、そのほとんどが、この世的な問題が原因となっています。聖書の理解をめぐる、あるいは、神学的な論争によって、教会が割れるようなことはめったにないのです。

コリントの信徒への手紙における、この問題への対応で、パウロの素晴らしいところは、教会の内部で起こった分裂の原因を追及したり、その問題を起こした張本人を明らかにするということ、一切していないということです。彼の手紙の目的はただ一つ、分裂を終わらせることにありました。人間の集まりに分派や分裂はつきものです。10人集まれば10の意見があり、30人いれば30の意見がある。なかなか一つにはなれません。人数がもっとすくない夫婦や親子の間でさえ、思うようになりません。それは、ひとえに人間の罪によるものです。人間は自己主張することにかけては抜群ひくとの能力を発揮します。ところが、人の意見を聞き、その忠告を受け入れるということはなかなかできない。他人の言うことをきかないのです。そこでは、対話が成り立ちません。結果的に、「わたしは誰々につく」というかたちの党派争いになる。しかし、そのような党派心は、自己追求の一つの変形バージョンはないでしょうか。党派心は、エゴイズムが集団化したものと考えることが出来ます。党派を作って、自分と意見の合う者の間だけで盛り上がり、自分の党派に属さないものとは口も聞かない。そのような党派心は、福音とはおよそかけ離れたものであります。パウロは、コリント教会の人たちのこの誤った行動に対して、5節で次のように語っています。「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えになった分に
応じて仕えたものです」この5節の最後で「仕えたもの」と訳されている言葉には、ほかの聖書の箇所「執事」と訳されている言葉が使われています。自分たちは、あなたがたを信仰に導くための執事だということです。そして、次の言葉が続きます。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」「大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させて下さる神です」パウロは、自分たちの伝道者としての働きを少しも誇っていません。パウロは開拓伝道者、アポロは教会建設者でした。パウロが種を蒔き、アポロがそれに水をやった。しかし、パウロはその自分たちの働きよりも、大切なのは成長させて下さる神なのだといいます。種を蒔くことは大変であり、水を注ぐことも容易ではなかったでしょう。しかし、種まきをする者も水を注ぐ者も、神の前ではいかほどの者でもありません。成長させて下さる神が重要です。パウロは自らの教会での奉仕を通して、神に栄光を帰することをつねに考えています。わたしたちは、ここから学びたいのです。もしも、教会のわざがうまく進まないとなれば、それは、そのわざによって、神ではなく人間の側に栄光が帰せられているからではないでしょうか。昨日は、教会で草取りをしました。もう半年以上草取りをしてなかったせい、教育館の裏手は、ドクダミが伸び放題でした。太陽の光が差すだけで、雑草はぐんぐん伸びる。今日の箇所「あなたがたは神の畑です」とパウロは言います。神さまをしっかりと見つめ、その日差しを受ければ、それだけであなたがたの信仰は大きく育つはずだとパウロは言うのです。

今から14年前に、当教会の前任牧師が辞任され、教会が無牧師となったときに、牧師招聘委員会が構成されました。その際に、次の牧師としてどのような方が来てほしいかということで、教会員にアンケートを募ったことがあったのです。いろいろな要望が寄せられました。気軽に何でも相談に乗ってくれるかた、性格がよく、思いやりや配慮があって、コミュニケーション能力が優れている方、語学力があるかた、社会経験もあって常識があり、リーダーシップがあって教会員を引っばってくれ、人間的にも尊敬できる方。さらには、心身ともに健康な方。まあ、あらゆる要望がアンケートに寄せられました。それを読んだある教会員が言ったのです。「こんな人はいない！」そのアンケートのなかに、一人だけ次のような意見を述べられた方がおられました。「たとえ、どのようなかたが牧師としてお見えになろうとも、自分はそのかたを主がお遣わしになった先生と信じて、その方と一緒に教会を立て上げてゆきたい」このアンケートは無記名で行われました。誰のご意見かは分かりません。しかし、わたしはそれを読んだとき、このかたは牧師という人間を見ているのではなく、その後ろで働いておられる神さまをみていらっしやるのだと思いました。教会の働きを、人間の業ではなく、神の業ととらえる視点がそこにはありました。大泉教会をもうすこしで退任する者として申し上げます。どうか、皆さま、この教会を、イエス・キリストの教会として立て上げてください。自分を誇ることなく、神に栄光を帰することをつねに考え、すべての人に仕えることができる謙遜な人をリーダーにしてください。何よりも神さまを大切にしてください。大泉教会が、これからもなおキリストの福

音を力強く宣べ伝える教会であり続けることを切に祈るのであります。

お祈りいたします。